

『この世全ての悪』を背負いし少年も異世界から来るそうですね？

クロック

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

十年前、正義の味方に救われた少年がいた。
あの地獄から。

そしてその少年は正義の味方となった。
だがもう一人、誰にも救ってもらえなかった
否・・・

『この世全ての悪』に救ってもらい、受け継いだ少年もいた。
そして少年は愉悦と王に救われた。

しかし十年後、恩人二人と、大切な人がいなくなった。
そして少年に手紙が届く。

彼を変える、異世界からの手紙が。
これは『この世全ての悪』を背負った少年と問題児達の物語。

目次

主人公設定	1
プロローグ	4
虚偽説明	9
白き幼女	13
現れた影	18
顔のない王	24
内部構造	28
過去話	33
第9話	38

主人公設定

・言峰 暗流

年齢 16

血液型 AB型

好きなもの 少しの愉悦、激辛麻婆豆腐

嫌いなもの 偽善者、正義

属性 混沌、悪

使用武器 右歯噛咬、左歯噛咬、黒鍵

流派 八極拳

経歴

6歳の頃に起きた第四次聖杯戦争で家族を死去。言峰綺礼、ギルガメッシュに拾われる。その時にアンリ・マユを受け継ぎ、体内に聖杯が入る。理由は不明。

ギルガメッシュと綺礼から戦闘技術を学ぶ。

その後国外でカレン・オルテンシアと接触。しばらくの間同居することに。その時にシエルと接触。火葬式典や土葬式典、風葬式典などを教えてもらう。

第五次聖杯戦争が起こると知らされ日本の冬木に帰還。

裏の監督役として暗躍。

第五次聖杯戦争中に現れたシャドウサーヴァントの殲滅を主としてきた。

その後、綺礼、ギルガメッシュ、死去。

カレンも行方不明に。

第五次聖杯戦争終了から一ヶ月後、異世界へ。

戦闘スタイル

アーチャーとキャスター相手には黒鍵を使い遠距離を主として隙ができたなら右歯噛咬と左歯噛咬による近距離戦闘。

八極拳は相手の防御が硬い相手などに使う。

火葬式典や風葬式典などは終盤にしか使わないという癖がある。はじめから使う時はよっぽど相手が強い場合のみ。

聖杯

第四次聖杯戦争終戦後に体内に入ってきた。壊れ呪われており願いを叶えることは出来ずに、どうやって人類を殺すかという決定権を与えることが願いを叶えるということになっている壊れた願望機。

英霊を召喚する機能は失われているがバグで本来ないはずの機能が追加されている。

これは暗流が聖杯を汚染した英霊をその身に宿しているからだと思われる。

追加された機能は暗流のステータス上昇、スキル付与、消去、令呪追加、魔力貯蔵。

暗流は令呪を爆発的な強化に使用しているので減りが早い。次々と令呪が追加されていくので便利。

ステータス上昇はこの上ないほど役に立っている。

ステータス

耐久 B+

筋力 B+

敏捷 A+

魔力 EX

運 B

宝具 A+

スキル

死滅願望 EX

黄金律 A

カリスマ B

直感 C

対魔力 C

千里眼 B+

単独行動 B

コレクター C

宝具

『偽り示し写す万象』『??』

周りへの評価

十六夜・・・自由すぎて困り者。まるでどこかの英雄王を思い出してしまおう。

飛鳥・・・気が強い。高飛車な態度は直した方がいいと思う。

耀・・・カレンを思い出してしまおう。守って上げたくなる的存在。

黒ウサギ・・・耳がいいから自由にできない。少しは控えろ。

ジン・・・あまり話さないから知らない。

周りからの評価

十六夜・・・何者か分からない。ただ名前からして興味はある。

飛鳥・・・戦っている時のあのアザって何なのかしら？

耀・・・よく接してくれる。麻婆豆腐美味しい。

黒ウサギ・・・自分に興味なさすぎです！

ジン・・・あまり話さないから知らない。

プロローグ

夢を見る。

十年前の夢だ。

夜なのに前がハッキリと見える。

所々から炎と硝煙が上がっている。

足元には沢山の焼死体が。

ただ前に歩き続ける。

助けて、という声が聞こえる。

それを耳を塞ぎ、無視を決め込み歩き続ける。

ただひたすらに歩き続ける。

手足の感覚が消えてきた。

目が霞初めて前がはつきりと見えない。

そして限界が来て地面に倒れる。

まだ雨が自分に当たっているのがわかる。

もうダメか、と思った。

既に体は死に体。

このまま自分は目の前で死んだ両親と同じようになるのだと
思った。

最後に目に映ったのは、まるで生きているかのようにこちらに向け
て進んでくる、ドス黒い泥と壊れている金色の杯だった。

地獄の中に二人の青年がいた。

一人は茶色がかかっている黒髪の男。

もう一人は金髪のカレキの上に足を組んで座っている男。

ちなみに二人共 Naked 状態だった。

「してどうするよ、綺礼」

金の男が話しかける。

「なに、しばらくはこの地獄を堪能するさ」

綺礼と呼ばれた男が返す。

「ならいいが、あれは何なのだろうなあ」

金髪の男、ギルガメッシュは興味深そうに目を向ける。

「どうした？ギルガメッシュ・・・ッ！」

綺礼は目を向けた瞬間固まった。

目の前にあつたのは倒れている少年に進み続ける自分達の体を構成している泥と、その泥を生み出し続ける、壊れた金色の杯だった。やがてその二つは少年の体にまとわりついて、元の少年の体になった。

信じられない、と綺礼は思った。

金色の杯・・・聖杯に気に入られた綺礼ならまだ分かるが、おそらくは何の接点もない少年に、聖杯がまるで惹かれているように少年の体に入ってしまったのだから。

「ほう、あの子供、そこらの雑種とは違うようだな」

ギルガメッシュが興味深そうに言う。

「して綺礼、アレを拾わぬか？」

ギルガメッシュの言葉に綺礼は驚く。

「あれは面白い。人間の、それもタダの子供が、聖杯に気に入られ、俺と同じように、英霊となるとはな」

「本当か、ギルガメッシュ？」

「ああ。まだ人間だが、死ねば確実に英霊になるのは確定よ」

「ふむ・・・面白い。ならば拾おう」

愉悦の為に、と言いつけて。

目が覚める。

起きたら知らない協会のような場所にいた。

履いているのはズボンだけで、上半身は裸だった。

自分に何が起きたのかは目覚めた時に理解した。

自分の体が変わったこと、自分がなにか・・・など。

ふと、自分の左腕を見る。そこには心臓から左腕の肘にかけて、黒い奇妙な刺青があった。

「目が覚めたようだな」

声が出た方を振り向く。

そこには目に光がない男と金髪の青年がいた。

「私の名前は言峰綺礼だ」

「俺の名は英雄王ギルガメツシュだ」

二人とも知っている。

なぜかと頭に情報が入り込んでくる。

この二人の生涯が、この二人の能力が。

「僕は・・・アンリです」

「やはり記憶を継いでいるか」

アンリの自己紹介にギルガメツシュが返す。

「記憶は継いでいません。あるのは能力と自分が何なのかだけです」

「そうか・・・まあよい」

ギルガメツシュは微笑しながら話を切る。

そこで言峰綺礼が

「アンリくん、ここで一つ提案があるのだが・・・」

「なんですか？」

「私の養子にならないかね？」

「いいのですか？」

言峰の提案は今のアンリにとってはとても嬉しいものだった。アンリは先の火災で親も家も失っているためこれからどうしようもできない。だから住居などはどうにかしてでも手に入れなければならぬものだった。

「受けます」

「そうか、よろしく頼むぞ、我が息子『言峰暗流』」

「うん、父さん、ギルガメツシュさん」

「ふむ、まあよい。名前で呼ぶことを許そう」

ギルガメツシュも嬉しそうに返した。

あれから十年。

暗流はギルガメツシュから力の使い方を教わり、綺礼からは自分に寄り憑いた英霊の主要武器の双剣を教わったり、魔術や黒鍵などを教わっていた。

英霊でも上位の身体能力。

それに自分に取り憑いた英霊の宝具が強化。

既にギルガメッシュはセイバーとも渡り合えると喜んで言っていた。

綺礼も覚えるのが早いと、最終的にはマジカル八極拳も教えてくれた。

綺礼の実娘である、カレン・オルテンシアにも仲良くしてもらっている。

だがもう彼等はいない。

ギルガメッシュは消え、綺礼は殺され、カレンは行方不明。

暗流は一ヶ月で恩人二人と、大切な人と会えなくなっていた。

今日も日課である双剣と八極拳の鍛錬を終える。

備え付けのシャワーで軽く汗を流し、ギルガメッシュからもらった服に着替える。

そして朝食を作り一人で食べる。

そして後はいつも通りカレンの情報を集める

カレンや綺礼、ギルガメッシュがいなくなってから同じように過ごしている。

十年前と同じく、自分はまた失った。

自分の中にある壊れた杯のせいで。

いつも通りパソコンをチェックしようとする机に自分宛の手紙が置いてあった。

気ままに開いて読んでみると、

『悩み多し異才を持つ少年少女に告る。その才能を試すことを望むのならば、己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、我らの“箱庭”に来られたし』

読み終わってあったのは体が引つ張られる感覚。

一瞬だけノイズのようなものが見えると次には空に放り出されていた。

しかも上空4000mに。

一緒にスカイダイビングしてる一人の少年と二人の少女と三毛猫。

一人はなにやら叫んでいる。
4人は一気に真下にあつた湖に落ちた。

虚偽説明

「し、信じられないわ！まさか問答無用で引きずり込んだ挙句、空に放り出すなんて！」

「右に同じだクソツタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜ。石の中に呼び出された方がまだ親切だ」

まず口を開いたのはプライドが高そうな女の子。

そして学ランにヘッドホンで金髪という派手な格好の男の子。

「石の中に呼び出されたら動けないでしょ？」

「俺は問題ない」

二人は早速口喧嘩をしている。

「ここ、どこだろう？」

ネコを抱えた女の子が口にする。

「どっからどう見ても異世界だろ。・・・英霊だってもっとまともに呼び出すぞ・・・」

最後に愚痴を言ったのは愉悦の養子、言峰暗流。

「まず間違いないだろうけど確認しとくぞ。お前達にも変な手紙が？」

「そうだけど、まずはそのお前って呼び方を訂正して。」

久遠飛鳥よ。その猫を抱えてるあなたと、黒髪のあなたは？」

「春日部耀。以下同文」

「いや、みんな呼び方にこだわりすぎだろ。言峰暗流だ」

「そう。女の子みたいな名前ね。よろしく春日部さん、暗流くん」

（早速名前呼びですか・・・）

「それで、野蛮で凶暴そうなあなたは？」

「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶暴そうな逆廻十六夜です。粗野で凶暴で快楽主義と三拍子揃った駄目人間なので、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれ、お嬢様」

（なんだコイツ、異常なほど霊格が高い・・・英霊候補か？）

暗流は壊れているながらも体の中に聖杯を宿しているので相手の霊格や真名は見ればたいいは分かる。

だからこそ十六夜を一目見て異常だと思ったのだろう。
「そう、取扱説明書をくれたら考えてあげるわ十六夜君」
「マジかよ、今度作つとくから覚悟しとけ、お嬢様」
心からケラケラと笑う逆廻十六夜。
傲慢そうに顔を背ける久遠飛鳥。
無関心を装う春日部耀。
そんな三人を値踏みするように見つめる言峰暗流。
彼等は人類最高位のギフト保有者達。

「で、呼び出されたはいいけど、なんで誰もいないんだ？案内人とかいるんじゃないの？」

不満そうな声を漏らす十六夜。

「そうね、何の説明もないままだと動き用はないもの」

「この状況に対して落ち着きすぎてるのもどうかと思うけど」

「いたとしたら切り刻んでやるか」

「二お願いそれはやめて」

手に黒鍵を数本持つ暗流にやめるように全速力で指示する三人。

暗流は冗談だ、と言いながら黒鍵をしまった。

「仕方がねえな。そこにいるやつにでも聞くか」

十六夜の視線が茂みの方を見る。

「なんだ、あなたも気づいてたの？」

「当然。かくれんぼじゃ負けなしだぜ？その2人も気づいてたんだろ？」

「風上に立たれたら嫌でもわかる」

「あれに気づけなかったら俺は既に死んでいる」

暗流はギルガメッシュとの特訓を思い出していた。

「へえ、面白いなお前ら」

「や、やだなあ御四人様。ここは黒ウサギの話聞いてくれたら嬉し

いのじいぢがいますよ？」

「断る」

「却下」

「却下」

「お断りします」

「火葬式典で燃やしてやろうか？」

「あつは、取り尽くしまもないですね。それで最後の方はその手に持っているのをお収めください」

バンザーイしながら涙を流して謝る黒ウサギ。

「えい」

と、突然春日部が黒ウサギの耳を掴んだ。

「な、何をするんですか!?突然黒ウサギの素敵耳を引っ張るとは！」

「好奇心のなせる技」

「自由にも程があります！」

「へえ、その耳本物なのか。えいー」

「なら私も」

三人は黒ウサギの耳を引っ張り出した。

暗流は長くなりそうなので地面に寝転がって寝ている。

ちなみに黒ウサギの悲鳴は一時間ほど続いていた。

「あ、ありえないのですよ！まさか話を聞いてもらうのに一時間もかかるとは。学級崩壊とはまさにこのことを言うのですよ」

ぜエゼエ、とか他で息をしながら服装を直す黒ウサギ。

「いいからさっさと進めろ」

黒ウサギは涙目で今にも倒れそうだが十六夜が話を聞くと言ったら元気を取り戻した。

「それでは始めますよ？ようこそ『箱庭の世界』へ！我々は御四人様に、ギフトを与えられた者達だけが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼントさせていたかどうかと召喚いたしました！」

後半の方の言葉に暗流の眉がピクリと動く。

これは暗流が直感的に相手の嘘を見つけた時の癖だ。

暗流は体内に壊れていながらも聖杯を保有しており、黄金律や直感等のスキルが高かったり低かったりと差異はあるが、全て保有している。

ちなみに今使ったのは直感スキルBだ。

そこからは嘘があまり混じっておらず、説明はスムーズに進んでいった。※原作と同じ。

「なあ、質問してもいいか？」

「どのような質問でしようか？ルールですか？」

十六夜の質問を先回りして当てようとする黒ウサギ。

だが十六夜は首を横に振り、

「そんなのはどうでもいい。腹の底からどうでもいいぜ、黒ウサギ。俺が聞きたいのはたった一つ」

十六夜は視線を外し春日部、久遠、暗流を見る。

「この世界は・・・面白いか？」

春日部と久遠、暗流は無言で返事を待つ。

家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨てて異世界に来た者達。

それに見合うだけのものがあれば彼らは自由に動く。

「Yes。『ギフトゲーム』は人を超えた者達だけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は下界より断然面白いと、黒ウサギは保証いたします」

黒ウサギの言葉は彼等に期待を抱かせた。

白き幼女

言峰暗流は世界の果てにいた。

もう一度言おう。

世界の果てにいた！

何故こうなつたか・・・話は数十分前まで戻る。

「なあ暗流、世界の果てまで行こうぜ」

箱庭の天幕の中へと歩いていく途中に十六夜が暗流に投げかけた言葉。

それに暗流は

(この世界は聖杯の情報を辿っても一つも当てはまることがなかった世界だ。それは知識がないと同じこと。それに世界の果てならば修羅神仏の一体や二体入るはずだ。どれ位強いのか、十六夜と並行で試せるかもな)

「そうだな、俺も行こうか」

「そう来なくっちゃな！」

ヤハハと笑いながら暗流の方に歩き出す十六夜。

暗流は、どうやっていくのか聞こうとすると突然首根っこを掴まれた。

「なあ、十六夜まさか・・・」

「勿論、俺がお前を連れてくんだよ！」

ドオオンという音とともに暗流と十六夜の姿が消え、代わりに小振りなクレーターが生まれた。

黒ウサギは鼻歌を楽しそうに歌っているので気付いてないが、春日部とか他で息をしながら久遠は哀れみの視線を向けて合掌している。それから世界の果てまで着くのはすぐだった。

十六夜の身体能力は英霊の中でもトップクラス。

それもランサーか高速移動の宝具を持つライダーの中でも上位に

位置するくらいはあった。

「こいつ現代の人間だよな？つて本気で考えてしまう暗流だった。

「しかし、世界の果てっていうのは随分といい光景じゃねえか！」

「まさかここまで美しいとはな」

ギルがいたらここは我のものだ！つていいそうだなと口ずさみながら十六夜の方を見ると十六夜は反対を向いて笑っていた。

暗流もつられて後ろを見るとそこには白い鱗のとても長い蛇がいた。

『小僧共、試練を選べ！試してやる！』

「なんか偉そうなのが出てきたな」

「ヤハハ！俺を試す？逆だよ、俺を試せるかテストしてやるよ！」

「小僧おとおおお！」

十六夜がふっかけると蛇？は怒り水の竜巻の様なものを出して襲いかかってきたが・・・遅い。

十六夜は既に持ち前の脚力で飛び上がり胴体に蹴りを加える。

あまりの威力に蛇？は一撃で湖に倒れた。

「そういえばこの蛇妙に神性が高いな。いわゆる蛇神か？」

暗流は蛇神に触れて神性の高さを確かめると、後ろから十六夜にも劣らな速さで黒ウサギが来た。

「十六夜さん！暗流さん！」

「ヤハハ、遅かったな黒ウサギ」

「ようやく来たのか」

「お二人共、何をしていますか?!」

「見てわかんねえか？世界の果てを見て来てるんだよ」

「思った以上に絶景でな、見蕩れてしまった」

「そんなことはいいですから早く戻りましょう！ここら辺を縄張りとしている神仏にゲームを申し込まれたら——」

「売ったぞ、ゲーム」

「既に終わらせたがな、十六夜が」

「えっ？それって」

「まだ勝負は決まってないぞ！小僧共おとおお！」

黒ウサギが暗流や十六夜の言葉に戸惑っていると倒れた蛇神が起き上がった。

「水神!? ていうか何であんなに起こっているのですか!？」

「十六夜が殴り飛ばした」

「おいおい言峰。俺はただ売られた喧嘩を買っただけだぜ」

「なら最後まで買った喧嘩にシメをつけろ」

「ハイハイ」

そう言っつて一同が水神の方に振り向くと叫びながら竜巻を4本作つて襲いかかつてきた。

「はっ! しゃらくせえ!」

その竜巻は十六夜の拳一振りでもたやすく消えた。

「なかなかだったぜ、お前」

十六夜は回し蹴りをして今度こそ水神をダウンさせた。

「人間が・・・水神に勝った?」

黒ウサギは十六夜の勝利に驚いているが暗流は

「あれは打ち消す・・・いや、砕いているのか。能力を砕くのなら俺とは相性最悪だな。ならば俺は・・・」

十六夜と敵対した時のことを考えて冷静に分析していた。

それからは十六夜と黒ウサギのコミュニティ「ノーネーム」についてのことを話していたが、暗流は未だに何かを考えていた。

「なんであの短時間に『フォレス・ガロ』に接触して喧嘩を売る状況になったんですかー!」

「ムシヤクシヤしてやった。今は反省しています」

「黙らっしやい!」

反省の顔が見えない飛鳥、耀、そしてコミュニティのリーダーのジン・ラッセル。

「まあいいじゃねえか。見境なく喧嘩売ったわけじゃねえんだからや」

「ならこの『契約書類』を見てください!」

『契約書類』にはお互いの勝利報酬が書かれていた。

こちらが勝利した時はガルドにしつかりと罰を与える。

こちらが敗北した時はガルドの罪を黙認する、というものだった。それから話を聞いていればリーダーのジンは何度も「正義」という言葉を使っていたのでとても気分が悪かった。

暗流は生まれながらの悪だ。十年前のあの日から■■■■は死に、新たに生まれたのがアンリィマユの生まれ変わりのようなもの、言峰暗流。

第五次聖杯戦争中にセイバーのマスター、自分と同じ生き残りの少年は『正義』を求めていたが、監視中はとても不快だった。

その事を思い出して暗流が顔を顰めていると耀が見ていたのに気付いて無表情にした。

それからジンを抜いたメンバーで「サウザンドアイズ」というコミュニティが経営している店に行くことになった。

黒ウサギの話曰く、暗流達はそれぞれ別の世界の別の時間、『立体交差並行世界論』という理論を元に箱庭に来たらしい。

暗流はそれをマスターが英霊を呼び出すようなもの、と認識した。

「まっ」「待ったナシですお客様」

サウザンドアイズの店の前に黒ウサギが飛び入りで入ろうとすると定員に呼び止められた。

「なんて商売つ気のない店なのかしら」

「全くです！閉店五分前に客を締め出すなんて！」

「文句があるなら他所へ。あなたがたは今後一切の出入り禁じます」

「出禁!?これだけで出禁ですか!?!」

暗流以外が騒いでいるのを他所に暗流はずっとその奥を見ていた。恐ろしく神性が高い、それも神造兵器よりも神性が高い人物がいる。

だが飛び出しながら出てきたのは幼女だった。

それも黒ウサギ目掛けて飛び出した。

それを黒ウサギはかわして蹴りで止めた。

それからは警戒しながら幼女、『白夜叉』の私室まで案内された。

それからの話はあまり覚えていない。

白夜叉の部屋に入った時から嫌な予感がするのだ。

暗流は前にも感じたことがある。

聖杯戦争中、自分の中にあつた聖杯と他所にあつた大聖杯。敗退した英霊は大聖杯の方へと導かれるが、少なからず暗流が持つ聖杯の中にも流れ込んでくる。

そして聖杯に収められた英霊達の余分な記憶等を消去するために英霊のカスは聖杯の外に捨てられる。

それが英霊の残滓、『シャドウサーヴァント』。第五次聖杯戦争中にも現れた『シャドウサーヴァント』は英霊には届かなくても十分に強いと言える。

普通は『シャドウサーヴァント』の気配なんてわからないが、暗流は体の中に壊れていながらも聖杯があるので『シャドウサーヴァント』の気配には敏感だ。

『シャドウサーヴァント』に知能はないが集団で来られると厄介極まりない敵となる。

それは第五次聖杯戦争中に分かっていることだ。

話はいつの間にか進んでいて決闘やら挑戦だとか言っている。

「おんしらが望むのは『挑戦』か——それとも『決闘』か?」

その瞬間、世界が変わった。

驚いている問題児達。状況が良くわからない暗流。

問題児達の反応を見る白夜叉。

そしてこの世界に連れてこられた、暗流達を見つめる黒い影。交わる時は近い。

現れた影

世界が変わった。

問題児達と黒ウサギ、暗流は驚愕した。

前者二つは初めての経験、未知に。

暗流は戦慄していた。

暗流は似たような現象を知っている。

それはいつかの征服王が、正義の味方が使っていたもの。

現代では世界を塗り替える禁忌の術。

時計塔などにバレればホルマリン漬けで標本にされること間違いなしの代物。

『固有結界』

これは自分の心象を現実に表すもので、殆どが攻撃性が高いものが多く、人間でも英霊と互角にやりあえるほど強力なものだ。

だが発動には詠唱が必要でありそれも戦闘中には致命的なタイムロスになる。

だが白夜叉には詠唱がなかった。

ただ質問しただけ。

それだけで広大な白い世界を出した。

こんなことかのできる英霊はグランドキャスター位しかない。

いや、グランドキャスターでもできないかもしれない。

これが神仏。神の領域に足を踏み入れた者。

勝てるはずがない、と暗流は思った。

「今一度名乗り直し、問おうかの。私は『白き夜の魔王』——太

陽と白夜の星霊、白夜叉。おんしらが望むのは試練への『挑戦』か？

それとも『決闘』か？」

目の前にいる元魔王は圧倒的な威圧感を出しながら再度問い掛ける。

目の前の新たな異世界からの挑戦者達へ。

「水平に廻る太陽と・・・そうか、白夜と夜叉。あの水平に廻る太陽やこの土地は、お前自身を表現しているのか」

十六夜はどうやら謎に至ったようだ。

「如何にも。この白夜の湖畔と雪原。これが私が持つゲーム盤の一つだ」

「これがゲーム盤の一つか。こんなのが何個もあるなんて・・・やる気が失せるな」

「なにか嫌なことでもあるの?」

「春日部・・・あまり聞くものじゃないぞ」

「・・・なんかごめん」

暗流はこのゲーム盤を『固有結界』と似たようなものだと思っ
ている。

だから、かの正義の味方が使った『固有結界』を思い出してしま

「参った、やられたよ。降参だ、白夜叉」

十六夜が両手を上げて白夜叉に答える。

「ふむ、それは決闘ではなく、試練を受けるという事かの?」

「ああ、これだけのゲーム盤を出したからな。いいぜ、今回は黙って試されてやるよ、魔王様」

それは十六夜の最大限の強がりだった。

「くくく・・・して、ほかの童達も同じか?」

十六夜の強がり笑笑返す白夜叉。

「ええ。私も試されてあげてもいいわ」

「右に同じ」

「そうか。して、そこのお主はどうする」

白夜叉は唯一答えていない暗流に問う。

暗流は白夜叉のほうを見ずに彼方を見ている。

「俺も同じだ」

「分かった。ならそろそろ始めるかの」

白夜叉がパン!と手を叩くと一枚の羊皮紙が現れた。

羊皮紙には

『ギフトゲーム名 “鷲獅子の手綱”

・プレイヤー一覧

逆廻 十六夜

久遠 飛鳥

春日部 耀

こ■世峰■暗の■流

- ・クリア条件 グリフォンの背に跨り、湖畔を舞う。
- ・クリア方法 力、知恵、勇気の何れかでグリフォンに認められる。
- ・敗北条件 降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

『サウザンドアイズ印』

書かれていた羊皮紙の暗流の名前部分は何かが混じった様に名前が組み合わさり、時折■で潰されていた。

何と何が合わさったかは暗流はすぐに思いついたが。

「お主、これは何じゃ?」

「いろいろ、複雑な事情があるんだよ」

「そうか」

それから白夜叉や他の人達は暗流に何も言わなかった。

「それはそうと、あ奴が来たようじゃな」

キエエエエエ、と甲高い鳴き声が空からした。

声のした方を見てみると一匹の動物がいた。

その動物は鷲の頭に獅子の体を持つ幻獣。

鷲獅子、グリフォンだった。

「さて、それじゃあ誰がやるのかのう」

「私がやる」

真っ先に耀が名乗り出た。

聞くところによると前からの夢だったようだ。

「別にいいぜ」

「いいわよ私は」

「好きにしろ」

暗流達は全員耀に譲った。

だが暗流は周りを見渡してキョロキョロしてる。

耀はグリフォンに近づいていく。

そして目の前まで行き話しかける。

「私と誇りをかけて勝負しませんか？」

グリフォンが鳴く。

耀以外には分からない返答だ。

「命を賭けます」

そして今度話した事はあまりに突飛な返答だった。

「駄目です！」

「春日部さん!?!本気なの！」

「本気も本気」

「しかし——！」

「やめろ黒ウサギ」

「暗流さん！」

「やりたいならやらせておけ。それが一番あいつの為になる」

「しかし！」

言い争っている2人を見かねたのか、白夜叉が前に出る。

「双方下がらんか。これはあの娘から出した試練だぞ」

「ああ、無粋なことはやめとけ」

「そんな問題ではございません！同士にこんなゲームをさせるわけに

は——」

「大丈夫だよ」

耀は振り向いて答える。

そしてグリフォンに跨り一言話して飛び去っていく。

「さて、そろそろ始めようか」

「ん？どうした？」

不意に暗流が漏らした言葉に十六夜が反応した。

だが暗流は十六夜を無視する。

「白夜叉、お前も薄々気づいてるんだろ」

「確信したのはさっきじゃがな」

「お二人とも、どうしたのですか？」

「白夜叉、場所は分かるか？」

「いや、全くじゃ」

「だから、どうしたんだよ」

「アレだな」

暗流はグリフォンが飛んでいった反対方向を見る。

それにつられて十六夜達も同じ方向を見ると、そこには『影』がいた。その影は人の形をとっており、周りから黒いオーラのようものが出ていた。

手には弓を持ち、マントのようなものを被っている『影』

「なんでございますの、あれは？」

「なんか、不気味ね」

黒ウサギと飛鳥は一步下がる。

「おもしろそうじゃねえかよ、おい」

逆に十六夜は一步前が出る。

「とりあえず俺の相手になれよ！」

十六夜は飛び出して『影』に殴りかかる。

『影』はすぐに後ろに下がり弓を構え矢を射る。

「んなもん効くか！」

十六夜は矢を無視してそのまま進もうとするが右足に矢が刺さった。

「なっ！」

十六夜にとっては予想外だった。

十六夜の体は銃弾でさえ貫通することがない体。

なのにそれを矢で貫いたのだから。

「くっ！動けねえ・・・」

やには即効性の毒が塗ってあったらしく十六夜は体がしびれて動けなくなった。

「十六夜さん！」

黒ウサギが飛び出そうとするが『影』は即座に黒ウサギに向けて矢を射った。黒ウサギには当たらなかったが、速さはかなりのものだったので動けずにいた。

『影』は今度は暗流達の後ろに弓を構える。

その先にいるのは、グリフォンと耀。

白夜叉も止めようとするが間に合わず、高速の矢が放たれた。

それは1キロほど離れたグリフォンの翼に刺さり、即座に毒を回らせ麻痺させた。

さらに弓を構える『影』。

そしてもう一度放たれる毒矢。

白夜叉はグリフォンの方に走り出している。

黒ウサギと飛鳥は耀の名前を叫ぶ。

十六夜はうずくまる。

だが矢は誰にも当たることは無かった。

途中で矢が斬られた。

バラバラに。

「なぜお前がこの場にいる。いや、どうせしやべれないだろ。答える必要は無い。お前を俺の中に戻してやる」

斬った本人、暗流は仇を見るような目で『影』を見る。

そして両手に持った奇妙な形の短剣、『右歯噛咬』と『左歯噛咬』をしまう。

「さあ来い、《ノーフェイス・キング》。俺が相手をしてやるよ」

暗流の顔に不気味な刺青が現れた。

顔のない王

『シャドウサーヴァント』について説明しよう。

シャドウサーヴァントはサーヴァントの残留霊基。英霊の霊基を模した偽物。サーヴァントのなり損ない。召喚者の実力不足、召喚陣の不備などで発生する。その姿は全て黒いシルエツト。

その出現方法は様々で、聖杯の不備で漏れでる、英霊を短時間で召喚するなど様々。

意思疎通できるかは個体ごとによって異なる。

シャドウサーヴァントは英霊のなり損ないであるため宝具を使えない。それは黒化の影響だ。

だが今暗流の目の前にいるシャドウサーヴァントは不完全ながらも宝具を使っていた。

暗流が相手をしているのは『ノーフェイス・キング』又の名を『ロビンフッド』。

最初に姿が見えなかったのは彼の宝具の『顔のない王』という本来は姿と気配を隠蔽する宝具だ。

だが消すことが出来ていたのは姿だけ。気配は少ししか消せなかった。

使えるとしてもどこかしら劣化がある。

これは暗流にとっては嬉しいことだった。

暗流は壊れていながらも聖杯を所有している。

彼の聖杯は未だに機能を停止していない。

だが英霊召喚は出来ず、可能なのは英霊や神話の知識を与える、呪いの自分への付与、そして泥を使った身体強化。

肝心の英霊召喚や万物の願いを叶える機能はない。

前者だけでも十分なのだがステータスを上げるだけでも限界がある。

敏捷は元々が早いのでA+まで伸ばせたが耐久と筋力はB+が限界。運に関してはBで止まった。

宝具は『この世すべての悪』と暗流が融合したのでA+になるほど

改変された。

スキルは外せたものと外せなかったものがあつた。

ちなみに付与することが出来たスキルはギルガメツシユのスキルがほとんどだった。

死滅願望のスキルは残してある。というか取れなかった。

これは暗流、『この世すべての悪』を表すものに近いため外すことが出来なかった。

諸々の理由はあるが暗流はロビンフッドを押ししていた。

暗流は英霊の中でも今は高スペックであり、十年間も手加減していたがアーチャーであり最高クラスの英霊のギルガメツシユと、下手な英霊なら生身で倒せる言峰綺礼を相手に訓練していたのだ。

ロビンフッドが放つ高速の矢もギルガメツシユの宝具よりは遅い。

既に双剣はしまっている。

今は手にした黒鍵で相手をしている。

後ろには毒で動けないグリフォンと十六夜がいるので後ろまで行かせてないが確実に暗流が有利だ。

「どうした？お得意の弓は使わないのか？」

飛んできた矢を指に挟んだ黒鍵で破壊して問う。

ロビンフッドは答えない。

「本来ならお前は弓を当てた時点でアイツらを殺せたらうに、それともお前の宝具《祈りの弓》は飾りか？」

矢が一気に四本飛んでくる。

その矢を黒鍵の剣の部分を巨大化させて相殺する。

黒鍵の剣の部分の巨大化は十年前に綺礼が使っていた戦法だ。これは自分に付与されている令呪を黒鍵に使用する事で強度などを上げている。

しかしこの戦法の弱点は黒鍵と令呪の数に限りがある点だ。

黒鍵は作ることが可能だが令呪は本来は英霊を無理やり従わせるためのもの。黒鍵一本の強化に令呪を一つ使用するためとてもな
く燃費が悪い。

だが暗流はこの戦法を取り続ける。

暗流の所有している壊れた聖杯は暗流自身に令呪を供給する機能がある。

なぜこんな機能があるのかは知らないが壊れている、もしくは呪われているから、ということまで考えないようにしてる。

暗流は矢を拳で破壊しすぎさま黒鍵を取り出し投げつける。

ロビンフッドは避けるが暗流が右手の拳を構え突撃してくる。

ロビンフッドは無理な体勢になりながらも必死で避ける。

ロビンフッドは体勢を崩すが暗流はそれを見逃さずに左手に黒鍵を取り出し投げつける。

ロビンフッドは避けることが出来ないと悟ったのか、左腕を犠牲にして直撃を防ぐ。

「刺したままは危険だぞ」

暗流がそういうと突然ロビンフッドに刺さっていた黒鍵が燃えだした。

ロビンフッドは急いで飛び退き黒鍵を抜くが、足にさらに黒鍵が刺さる。

今度は刺さったところが石化してきた。

「全く、黒鍵を八十本も使い、最後には火葬式典と土葬式典まで使っちゃったんだ」

周りには黒鍵の破片は一つもない。

黒鍵を使用するものは自らの魔力から精製する者がいる。

暗流は刃から柄まで生成してしまうので柄も破片も残らず魔力に帰る。

これも魔力量がEXだからだろう。

「終わりだ」

一瞬の踏み込みでロビンフッドとの距離を詰める暗流。

暗流は握った右の拳を八極拳の要領でロビンフッドの心臓に叩き込む。

この技は綺礼から教わったものだ。

心臓が破裂した感覚が拳に残る。

ロビンフッドは衝撃で吹き飛ばされていく。

50mほどで勢いを止めて倒れ込む。

その黒い体は徐々に消滅していつてる。

最後に何かを聞いたそうだがもう聞こえない。

最後まで消えていく様を見届ける。

消えたことを確認したら自分の刺青が消えていくのがわかる。

残ったのは体への負担とシャドウサーヴァントが現れた謎、それだけだった。

内部構造

「終わったぞ」

シャドウサーヴァントと戦い終わった暗流は全くといいほど傷はなかった。せいぜい汚れくらいだ。

「お主、今のはなんじやったんじゃ」

「そうだぜ。それに『ノーフェイス・キング』ってのは」

「今はまだ話すつもりは無い。まあ、近いうちに話すがな」

暗流は白夜叉と十六夜の質問に答えず服に付いた汚れを払っていた。

「まあいい。全員無事で試練もクリアしたんじゃ。お主らには報酬を与えんとな」

「あつ、白夜叉様。ギフトの鑑定をお願いしたいのですが」

白夜叉はそれ以上追求してくることはなくなりギフトの鑑定を始めた。最初は耀の所有しているペンダントに意識が向いていたが本格的に鑑定を始めることになった。

「ふむふむ、四人とも素養が高いのがわかる。特に言峰とやらはな。しかしこれではなんとも言えん。おんしらは自分のギフトの力をどの程度把握している？」

「企業秘密」

「右に同じ」

「以下同文」

「理解出来ない」

「仮にも対戦相手だったものにギフトを教えるのが怖いのはわかるがそれじゃあ話が進まんじやろ」

暗流の場合は本当に理解出来ないのだが。

体内に壊れ呪われていながらも聖杯を保有している暗流はどこまでできるのかわからない。

「まあ、何にせよ勝者には報酬を与えねばな」

白夜叉がパンパンと手を打つと暗流達の前にそれぞれ色の違うカードが現れた。

コバルトブルーのカードには 逆廻 十六夜 ギフトネーム 〃
正体不明〃

ワインブルーのカードには 久遠 飛鳥 ギフトネーム 〃威光

〃
パールエメラルドのカードには 春日部 耀 ギフトネーム 〃生
命の目録〃 〃ノーフォーマー〃

暗黒色のブラックなカードには 言峰 暗流 ギフトネーム

〃この世全ての悪〃 〃マジカル八極拳〃 〃壊れた聖杯〃 主催者権
限 〃固有結界：■■■■〃

黒ウサギはカードを見ると

「ギフトカード！」

と驚いた声を渡すが暗流達は

「お中元？」

「お年玉？」

「お歳暮？」

「これはどうやら貴重そうだ。目の前で切り刻むこともまた愉悦」

3人はボケで1人は危ない考えをしている。

「ちがいます！ギフトカードです！とつても高価なんですよ！それと
暗流さんは剣を取り出すのはやめてください！」

「ちっ」

「舌打ちしないでください！これは顕現しているギフトも収納できる
超高価なカードなんですよ！」

「って事はこの水樹ってのも入れられるのか」

「そうでございます」

暗流にとつてはもうこれは射出不可能なギルガメッシュの宝具に
見えてきた。そう思えば確かに高価だ。

「そのギフトカードは通称 〃ラプラスの紙片〃。即ち全知の一旦。鑑
定はできずともそれを見れば大抵のギフトは分かる」

白夜叉からカードの説明が入る。暗流が驚いたのは最後と八極拳
位だ。今はもう宝具扱いにしている。

「へえ？じゃあ俺のはレアケースなわけだ」

ん?と白夜叉が十六夜のギフトカードを覗き込むとそこには「正体不明」と書かれていた。

「いや、そんなバカな…」

白夜叉はありえないものを見てるかで言う。

「『正体不明』だど? いいやありえん、全知である『ラプラスの紙片』がエラーを起こすはずなど」

暗流はこのことを聞いてすぐに複数の仮説を用意し始めた。絞り込むのは今はやらない。

「何にせよ、鑑定はできなかったってことだ。それよりも俺は暗流のギフトカードの方が気になるがな」

「そうか。ほら、好きに見ろ」

他のみんなは内容を晒したが暗流だけ晒していなかったので近くにいた耀に渡してみんなで見始める。

見てすぐにみんなの顔色が変わる。

「ねえ、『この世全ての悪』って何?名前からして不吉そうなんだけど……」

「お嬢様、それは拜火教における悪神の名前だ。二元論の拜火教で悪を司っていたはずだが、名前は『アンリ マユラ』だったはずだ」

「いや、違うな」

「何?」

「違うとはどういうことじゃ?」

「白夜叉。歴史とはどこかで必ずねじ曲げられる。これもその産物。

俺の『この世全ての悪』は世界中の悪意をたった一人で背負い生贄となった青年のことを表している。悪神とされていただけだよ」

「ならなぜお主にそんなギフトが宿っている」

ほう……的確だな、と内心褒めながら説明する。

「十年前にいろいろあつてな。その時に取り憑かれた。もちろん記憶も断片的だがあるぞ」

苦しみのな、と付け加えて言葉を切る。

「どういうことじゃ!?!お主、聖杯を所有しているのか!?!」

「聖杯って凄いの?」

飛鳥は昭和から呼び出されたので聖杯のことを知らないようだ。

「すごいなんてもんじゃねえよ、お嬢様。かつて騎士王であるアーサー王が円卓の騎士に探させた聖杯伝説、キリストの最後の晩餐に使われた杯。かなり有名だぞ」

「十六夜、それも違うぞ。俺の所有する聖杯は持ち主の願いを全て叶えるためのものだ。そして聖杯戦争の道具だ」

「なぬっ！持ち主の願いを全て叶えるためのものじゃと!?ありえん！そんなものがあってたまるか！」

「だが俺のはそんなにいいもんじゃない。壊れているし呪われている。俺の聖杯はどうやって人類を滅ぼすかの決定権を委ねるだけだ」
「なっ!?」

周りが驚いているのを他所に耀が暗流に問う。

「戦争の道具って?」

「いい質問だ。この聖杯を得るにはある儀式をする必要がある」

「その儀式って何かしら?」

「簡単だよ。7人のマスターとその使い魔、サーヴァントによる殺し合いだよ」

「なっ!?」

「暗流君はそれをしたの!」

「いや、俺は十年前に聖杯に取り憑かれてな。今では役には立つからいいが。それと俺は聖杯戦争には参加してない。あくまで監督役の補佐だけだ」

「その使い魔ってのは?」

「さつきも見たる。歴史や神話に出てくる英雄達。それを従えるんだよ」

「バカな！ただの人間が過去の英雄を従えられるはずがない！霊格が大きすぎるー！」

「だから聖杯を中間に置くんだよ。それと過去だけじゃない、未来もだ」

最後の言葉に周りを絶句させる。それぞれの暗流を見る目は違った。

「なら最後の書かれてないのは何？」

「いや、それは俺にもわからん。固有結界を保有しているのは初めて知ったからな。おそらく内容は十年前のあの日……」

暗流の頭に思い浮かぶのは十年前のあの光景。

暗流の顔が暗くなったのを見ると周りにはもう何も言わなくなった。

それから暗流達はホームに戻った。

過去話

白夜叉の店から夜まで何事も無かった。

あつたとしてもコミュニティの子供達への紹介と、魔王の凄まじさを見せて貰った位。

暗流達のコミュニティを襲った魔王はたった3年で何百年もたったというほど風化させることが出来るらしい。

“天地乖離す開闢の星”を見たことがある暗流には「この程度」という認識しかなかったが。

暗流の部屋は一番端にある大きい部屋。

そこには既に前から自分が使っていたような感じでトレーニングをしている暗流がいた。

これは暗流の日課のようなものだ。

執行者としての活動を始めてから自分の体力不足を悟り、ギルガメッシュ達との訓練の合間に体力を上げることにした。

魔術回路は酷使すればする程疲労が貯まる。

暗流は聖杯から魔力を引っ張ってきてるため常に流しっぱなしにしている。

暗流のステータスは英霊、”アンリマユ”よりもかなり高いとはいえ、それは自分の魔力で身体能力を底上げた時の値だ。強化しなかった時のステータスは”アンリマユ”と同スペック。

それ故に暗流は聖杯からの強化された魔力を扱うことで身体能力を底上げしている。

戦闘中は身体強化を使い続けても問題は無いのだが、暗流は黒鍵や宝具である『右齒噛咬』と『左齒噛咬』を使い回しにしている。

黒鍵は元々投擲用の物なので魔力消費は少ないが、双剣に関しては曲がりなりにも宝具だ。

黒鍵よりも使い慣れているとはいえ、黒鍵と同じようにいくらでも作れるというわけではない。

少なくとも両方作るのに黒鍵30本分は魔力を消費する

これらの理由から暗流は普通の魔術師では考えられない魔力の使

用と、戦闘方法のために、他人よりも体を鍛えなければならない。

「・・・1988・・・1999・・・2000・・・！」

腹筋をやり終えてタオルで汗を拭く。

髪に伝う汗は雫となり床にこぼれ落ちる。

「暗流、入っていい？」

窓を開けて体を冷やそうと思っていた時、耀が扉をノックした。

「少し待ってくれ」

分かった、と返事を聞きシャツを着る。流石に暗流も年頃の男子だ。女子に上半身とはいえ裸を見られるのは恥ずかしい。

「いいぞ、入ってくれ」

お邪魔します、と言いながら入ってくる。三毛猫もついて来ており、耀の足下から入ってくる。

「少し汗臭いが我慢してくれ」

「いいよ、気にしてないから」

「それで、何の用かな？」

耀をベッドに座らせて暗流は窓の隣に背中を預ける。

三毛猫は耀の膝の上に飛び上がる。

「飛鳥から聞いた。助けてくれたんでしょ？」

「いや、礼には及ばぬよ。折角できた友人だ、それにアレに対処できるのは俺か白夜又だけだったからな」

何でもないように返す暗流。

「それでもだよ。助けてもらったことには変わらないから。ありがとう」

「素直に受け取っておくよ。それで、他にも用件があるんだろ？」

「うん。暗流って十年前に何かあったの？」

耀がストレートに聞いてくる。

暗流としてはあまり答えたくない事だ。いつかは話すかもしれないが今からとなると躊躇ってしまう。

「教えてくれない？」

耀が可愛らしく首を傾げる。膝にいる三毛猫は教えろ、と威嚇する

ように鳴く。

「分かった、教えよう。そのかわりここでは少し都合が悪いからな。外でいいか？」

耀の確認をとり服を着てホームの外にある十六夜がとってきた水樹の場所まで行く。

ここまで来たのは黒ウサギにこの話を聞かれたくないからだ。黒ウサギは耳がいい。暗流は耀以外には聞かれたくなかった。

正直自分でも驚いている。

まだ誰にも話すつもりはなかったのに耀には話そうとしている。暗流は耀の雰囲気がかレンに似ているからだと思った。

「さて、まずは俺の『始まり』から話そうか」

淵に腰掛け耀が真剣な目で暗流を見る。

「昔、とある街に一人の少年がいた。少年は生まれて数年、何もなく平和に過ごしていた。」

「だがその少年が7歳のころ、少年の人生に転機が訪れた」

「少年が住んでいた街が原因不明の大火災によって焼かれていった」

「少年はその時、家族を全員失った。仲良くしていた友人もだ」

「街は炎の地獄と化していた」

「周りから聞こえる悲鳴と『助けて』という救済を求める声」

「少年はその声を耳を閉じ、聞かないようにして心に鍵をかけ、地獄を歩いていった」

「だが所詮は7歳の少年だ。動ける距離にも限界はある。少年はすぐに体が疲弊し動けなくなった」

「意識が失われる前に少年はある二つのものを見た」

「どこまでも暗い負の感情が凝縮された『泥』と地獄の中で輝く『黄金の杯』」

「その二つは少年の体に入っていた」

「倒れた少年を見つけた男2人はその光景を見ていた」

「一人の男の提案で少年を引き取るようになった」

「もう一人の男は教会で聖職者をしていて少年の義父になった」

「提案した黄金の男は気付いた。少年が『異常』だと」

「この時には既に少年は『悪』と『人類をどう滅ぼすかを決める決定権』を所有していた」

「少年もそれに気付いた。だからこそ力を手に入れ、戦うことを選んだ」

「二人の男は少年が強くなるのを手伝った。剣の使い方を教え、状況判断能力を鍛え、直感を鍛え、体も鍛えた」

「そして十年後、二人の男はある儀式で姿を消した」

「そして少年が大切に思っていた女性も消えた」

「ここまで話すと暗流はフウ、と息を吐く。

大分省略したがこれは紛れもない暗流の人生だった。

暗流は自分のこれまでを恨んではない。むしろ良かったと思えている。

そう思えている時点で自分も綺礼と同じように『壊れている』のだと感ずる。

耀の顔を見ると泣いていた。

「なぜ泣いている？」

「辛くないの？全部なくして、手に入れたものもまた失って」

「辛い、と思うこともあったが慣れてしまった。だからこそもう無くしたくないんだ」

それは数年前に決めた決意。

強大な『悪』のを持ってしまったからこそ、二度と失わないために決めた決意。

「今日はもう戻ろう。今度は耀の事を教えてくれ」

軽く笑いながら話しかける。

「いいよ。先戻ってるね」

耀は走りながらホームに帰っていく。

暗流は微笑しながら耀の背中を見守る。

「また、今度か・・・グガッ！」

耀の姿が見えなくなったら暗流の心臓に鋭い痛みが走る。

この痛みを暗流は知っている。聖杯戦争時にサーヴァントが脱落していく度に起きる痛みと、『この世全ての悪』に閉まっているものだ。

ここ一年で胸ぎ痛む回数は増えていく。

それは全て『この世全ての悪』を使用してから24時間以内に起こる。

しばらくしたら痛みが引いたので暗流は深呼吸する。

「さて、どこまで持つか・・・」

暗流は爆音を無視しながらホームに戻っていった。

第9話

森に砲弾を撃ったような、轟音が響く。

森の中には二つの影。その二つは全力で疾走している。

片方が両手の銃を連射する。持っている銃の種類からはありえないほどの連射。

迫り来る弾丸をもう片方の影が両手に持った歪な双剣で切り払う。その技術は一瞬で自分へ当たる弾丸を正確に見切り、必要な分だけを撃ち落としている。

双方が三次元的な機動で翻弄する。

木を蹴り、枝を蹴り、草木を切り裂き、相手の動きを予測し、地面を踏み碎き……。

ただ戦闘は加速していく。

耀と飛鳥、そしてジンが参加するギフトゲーム。会場は「フオレス・ガロ」の本拠の館で行われている。

暗流は観戦せずに、館の横の森を歩いている。理由は簡単。シャドウサーヴァントの気配を感じたから。

暗流の今の最優先事項はコミュニティの復興ではなく、シャドウサーヴァントなどの英霊達の対処。

分かることはクラスがライダーということのみ。

ライダーは宝具が多く、高速移動ではなく移動しながら破壊する宝具が多い。森の中で使うようなものは少ない。

そのことを前提として頭に留め、暗流は森を進み続ける。

そして拓けた荒地に出る。半径三十メートルほどの荒地。周りを森で囲まれ、中心に黒い影がいる。漏れでる障気の隙間からは女性らしき四肢が見える。

暗流はライダーから15mほど離れた位置に立ち、黒鍵の柄を創り出す。

ライダーはフロントロック式、俗に言う『海賊銃』を両手に持ち、腕を垂らす。

館からさほど離れていないため、獣の咆哮が聞こえる。咆哮と同時に幾つもの銃声が鳴り響く。

暗流は柄から刃を出し、冷静に弾いていく。ライダーが横へ駆けながら海賊銃を撃つ。暗流もライダーと同じ方向に走り出し、またも銃弾を弾く。

黒鍵は耐久力がそこまでなく、一、二、三発弾く事に霧散する。ライダーの怒涛の銃撃を、黒鍵でいなし続ける。

ライダーも真面目に真つ直ぐに進んでいるわけではなく、右や左へと進路を変えながら強襲する。

暗流の両手の黒鍵が同時に碎ける。それと同時にライダーが暗流へと急接近。物理法則を無視した膝蹴りが飛ぶ。

暗流は黒鍵を交差させ、膝蹴りから逃れる。だが相手はサーヴァント。暗流の黒鍵を砕き、暗流の腕に痺れを残す。

次の瞬間、ライダーの姿が消える。いや、上に跳び暗流を上から狙っている。

暗流は黒鍵を創らず、今度は歪な双剣、『右歯噛咬』『左歯噛咬』で上からの銃撃を防ぐ。

リロードと弾切れが起こらない銃撃に暗流は防戦一方。ライダーの空中での跳躍時間は異常に長く、攻撃は止まない。

ライダーが地面に着地する。暗流は即座に後ろへと飛び退き、距離をとる。

だがそれは、ライダーの宝具を開帳させる行為だった。

ライダーが右腕の海賊銃だけを暗流に向ける。同時にライダーの背後に魔力が溜まる。

宝具の発動、暗流はそれを感じ取り、強化されていた感覚を更に強化する。

そしてそれは現れた。

まるでどこぞのAUOみたいに黄金の波紋が作られる。そして中心からは黒い大きな円筒。暗流の背中に冷たい汗が走る。頭の中で

警鐘が鳴り響く。

自らの直感に従い、暗流は横へ飛び退く。次の瞬間、暗流のいた場所が轟音と共に抉られ、クレーターが作られた。

『黄金鹿と嵐の夜』。それがライダー——フランシス・ドレイクの宝具。本来なら彼女の船を丸々出すのだが、シャドウサーヴァントとして劣化した今、砲台を二つ出すのが限界である。

だが宝具まで昇華された砲台。その威力は並みのものではなく、直撃すれば当然のようにどんな英霊でも木端微塵となり、消滅は免れない。

爆熱と衝撃波で暗流は吹き飛ばされる。連射できないのが唯一の救いだ。

暗流はすぐさま起き上がり、森へ逃走する。ライダーがそれを見逃すはずもなく、暗流のことを追いかける。

二人は木の上で熱戦する。攻撃に余裕が出来た暗流は黒鍵を投擲する。ライダーも銃撃するが、暗流が木を見を隠すことで無駄となる。

突如、暗流の気配が消える。高速移動の宝具かと思い、ライダーは辺りを見渡す。実際、暗流はその場から動いていない。

スキル——気配遮断

アサシンクラスのススキルである気配遮断で、暗流はあることをしていた。

魔力を練り上げ、糸のように錬金して、動かす。

ライダーは辺りに銃弾をばら撒くが、そこに暗流はいない。

(いける……)

暗流は静かに立ち上がり、ライダーに向けて飛び出す。ライダーは暗流に銃を向ける。その時、暗流が腕を振るった。

「——ッ！」

銀の細い光が舞い、光はライダーのもつ海賊銃を巻きつく。暗流が反対の腕を振るう。

再度現れる銀色の光はライダーの体に向かって迸り、その四肢を切り裂く。

ライダーは咄嗟に後ろに下がるが、何かに引っかかって速度を落とす。

暗流が操っているのはワイヤー。この魔術はかつて第四次聖杯戦争で聖杯の器となり飲み込まれたホームンクルス、アイリスフィール・フォン・アインツベルンが使っていた、アインツベルンの奥義『錬金術』。

本来なら貴金属に魔力を通して行うのだが、暗流は黒鍵の刃を、細くしなるような構造を前提として創り、魔力を通して使っている。

『錬金術』は等地交換なので、本来なら代償が必要なのだが、暗流の体にある聖杯の泥で代替している。

暗流はワイヤーを創り、辺りに結界の様にばら撒き、ライダーの移動を封じた。

海賊銃を封じたライダー——フランシス・ドレイクだからこそ、彼女は状況を脱する為に宝具を使う。

再度現れる黄金の波紋。波紋は暗流に向けられ、その奥から砲台を覗かせる。

暗流は動かず、ライダーは動けない。だがこの一撃で全てが決まる。暗流の両手は糸で塞がっており、黒鍵も『右歯噛咬』も『左歯噛咬』も出せない。

砲台から魔力で作られた砲弾が放たれる。そこでようやく暗流が動き出す。体の周りに糸を展開、自らを繭のように囲む。これをするとうりが見えなくなるが、防御に関しては最強と言える。

ライダーの砲弾が糸の繭へ当たる。砲弾は爆発し、爆発した時に出る衝撃波と熱が、糸へ襲いかかる。

糸は千切れ、溶けていく。本来なら、糸はすべて消え、暗流の体は焼け飛ばされているだろう。だが暗流は無傷のまま立っている。

糸の繭は千切れたたり焼かれたり、欠損した部分を周りが直していく。可能ならば周囲から集める。不可能ならば作り出せ。この状態は暗流の膨大な魔力を喰らい尽くす。

魔力回路が悲鳴を上げるが、泥が無理矢理修復する。気を抜けば暗流はすぐに死ぬだろう。

